

## 240 中央大学辞達学会

『法学新報』第十九卷六(二二二)号

明治四十二年六月一日

○中央大学辞達学会 同会は去月十六日午後一時第二回演説会を中央大学大講堂に開く定刻に至るや奥田会長は立て開会を宣し天野徳也氏を紹介せらる氏は「検事論」と題し検事の地位を論じて現行法を駁撃し検事を独立せしめ且或る条件の下に合議制と為すと同時に検事専属の補助機関を設くへしと述へ田中佳次氏は「空中の領域」に付てフォシヤル、ナイス一派の消極論に痛撃を加へ戸石正憲氏は「社会改良主義の根拠」と題し社会政策的施設の必要を絶叫し鈴木唯一郎氏は社会の現状を論し横田稔氏は「洋々の流」と題して快弁を振ひ最後に石山彌平氏は急霰の如き拍手に迎へられて登壇し「家に就て」なる題下に有形の家は措て問はず予の論せんとするは無形の家なりとの冒頭にて家名家産家督に付きて懇切に説述せらる(氏の演説筆記は本誌上に掲載の筈なれば爰に之を略す)時將に五時半数名の弁士其順番の到るを待つありしも朝来の風雨彌々烈しく聴衆聊か倦怠の色あれば奥田会長より閉会を宣して一同解散したり因に花井副会長は旅行中の故を以て欠席せられしは甚だ遺憾なりし

(篠生報)